図書だより

〈第21号〉
平成元年10月31日
呉工業高等専門学校
図書委員会

▲ St. James's Park　（ロンドン）（藤原章正撮影）

目　次

〔読書感想文〕
文学　「ビルマの竪琴」（竹山　道雄）…… 1C　片岡　真樹……2
「二十四の瞳」（壺井　栄）…… 1A　久保　桃代……2
歴史　「秩父困民党」（井出　孫六）…… 2M　木村　保之……3
「秀吉と利休」（野上弥生子）…… 2M　濱本　寿彦……4
「悪魔の飽食」（森村　誠一）…… 2E　宇都　孝行……4
「勝海舟」（高野　澄）…… 2E　山本　秀平……5
政経　「軍魂」（西村　建吾）…… 3M　橋本　勝人……5
「日本経済学」（石ノ森章太郎）…… 3M　安田　幸司……6
「昭和の政党」（粟屋憲太郎）…… 3E　大胡　圭一……7
「中国の旅」（本多　勝一）…… 3E　福田　善道……7
〔随想・読書雑感〕
「土木への序章ーいつも通る路、渡る橋ー」（田中　輝彦）5C　横畠千恵子……8
都市のあそび場…… 5A　松崎　雅恵……8
〔新任者随想〕
事実のフレーム…… 機械工学科教官　上浦　良友……9
いっすんせんがん…… 図書係長　西本　勉……10
〔私の推薦する本〕
「建築　私との出会いⅠ・Ⅱ」（彰国社）…… 建築学科教官　篠部　裕……11
「米国の日本占領政策　上・下」（中央公論社）　一般科目教官　寺本　康俊……11
「よくわかる構造力学ノート」（技報堂出版）　土木工学科教官　西谷　庸雄……12
「ご冗談でしょう、ファインマンさん　Ⅰ・Ⅱ」
（岩波書店）…… 機械工学科教官　林　武美……12
〔新着図書30選〕……14
〔海外だより〕
イギリス…… 土木工学科教官　藤原　章正……17
〔お知らせ〕
昭和63年度図書統計……21
夜間開館始まる……22
書庫増設決まる……22
〔編集後記〕……22

読書感想文

文学

「ビルマの竪琴」

（竹山　道雄）

1C　片岡　真樹

「本当は戦争なんかやりたくなかった。これからだってやってほしくない。」 ぼくは遠いビルマで戦死した人達がこう叫んでいるような気がした。

この本の中で心に残ったことは、終戦したことを知らずに歌う部隊が山奥の村へやってきた場面である。

敵・味方関係なく心を一つにして合唱し、家族の写真を見せ合った夜。本当に憎しみ合う者同志ならとてもここまでできないと思う。あの合唱は、平和を願う声だったのかもしれない。イギリス人も日本人も平和を願う気持ちは同じなんだと思った。

そして、もう一つ心に残ったことは、兵隊達が議論した軍服と袈裟の問題である。ビルマ人は、一生に一度袈裟を着、日本人は、軍服を着る。果たしてどちらがいいのだろうか。軍服は日本の工業を発展させたが戦争に負け、大変苦しんだ。袈裟は、工業も生活も発展させなかった。でもぼくは、ビルマの人がかわいそうだとも遅れているとも思わない。自分の意志も言えずに戦争に行った人の方がかわいそうな気がする。

工業も、科学も進歩しなければならない。が、戦争をしていたころの日本は、大事なものを忘れていたのでは……と思う。この大事なものがビルマにあったのではないか。だから、水島上等兵はビルマが好きだったのではと思う。

「わたし……ビルマ人……ビルマはいい国……。」

水島上等兵の言葉が袈裟と軍服の問題のヒントのように思えた。こんな人だから数十万の人々の遺骨が見過せなかったのかも知れない。この意志はとても強いものだと思う。それは、「おうい、水島、日本へ帰ろう。」という青いインコと、「ああやっぱり自分は帰るわけにはいかない。」という青いインコの言葉からも感じられた。今帰らないと、一生故郷の日本には帰れないかもしれないのに、普通あんなことができるのだろうか。ぼくにはとてもできないと思う。「あの人達は死んだんだ。日本に帰って生きている人のために働こう。」とたいていの人は考えると思う。この考え方も間違ってないと思う。でもそれでは、むりやり戦争に引き出されて死んだ人があまりにもかわいそうに思う。水島上等兵が全部の遺骨を葬れなかったとしても、戦死した人は、うれしかったろうと思う。

今世界では、核兵器が競争のよう作られている。その数は、地球を数十回も滅ぼすことができるそうだ。

戦争は、人間として起こしてはいけないことだ。みんな平和を願っている。なのになぜ核があるのだろうか。

「もう二度と戦争はしない。核も作らない。」と、世界の人々が言えるような日を一日も早くつくらなくてはと思った。

「二十四の瞳」

（壺井　栄）

1A　久保　桃代

この物語は、昭和３年（1928年）から敗戦の翌年、昭和21年（1946年）までの十数年間のできごとですが、日本にとっての激動の時代であり、その中で国民は、暗い谷間におしこめられたような感じの時期でした。

物語の発端は、一本松のある村から岬の村へ若い女の先生が赴任してきたことから始まりました。先生の名前は〝大石久子〟といい、着任の日からたちまち村の話題になりました。それは大石先生が準教員ではなく、師範出の正教員のぱりぱりであること、洋服を着ていること、自転車でかよってくることなどのためです。でも実際、洋服は母親の着物を染め自分でぬったものだし、自転車も５ケ月の月賦で手に入れたもので、それを知らない男先生や村人たちは反感をもったのでした。でも大石先生はめげず、子供たちに対する愛情はあついもので、しだいに子供たちはうちとけ、村人たちも親しみを感じるようになっていました。

昭和８年、太平洋戦争に突入するころ、治安維持法

に違反し、〝あか〟と言われて正当なあつかいをうけていないという人がいたそうですが、このことはおかしいと思いました。まあ、この時代ではおかしいと思う人のほうがおかしいのかもしれませんが…。

幼い子供までを戦争に行かさなくてはならない、戦死して名誉のしるしを家の門にかざると尊敬の目で見られる、一家から一人も戦争へ行ってないと家族みんなで肩身のせまい生活をしなくてはいけないなど、今考えるとおかしいことばかりです。おかしいどころか人間の考えることではないと思います。日本を築いていかなくてはならないのに、若者たちを戦争へ送ってしまう…。ふつうではこういうことは考えないと思います。これもみな戦争というものがおこしたことだと思います。

小学校１年生のときの12人の子供たち、その中の５人の男の子のうち、３人が戦死、一人が失明してしまうという残酷さです。女の子といえども、小さいころに母に死なれてどこかへ行ってしまった子、医者も薬も肉親もないまま、たった一人物置のすみでいつのまにか死んでいたという子。他の子もみんな思うとおりの道には進めず、苦労ばかりしていました。先生のほうも夫は戦死、母も病気で亡くし、ついで娘まで…。という残酷さです。どんな悲しみだったのでしょうか。私にはわかることができませんが、この時代、悲しみのない人なんていなかっただろうと思います。今の悲しみになんか比べることができないだろうと思います。戦争ということからおこった悲しみ、苦しみは、全国共通であり大きいものであったと思います。

この物語の主題は、「強く積極的に戦争に反対し、戦争をひきおこす国家権力への抗議」ということになると思います。

歴史

「秩父困民党」

（井出　孫六）

2M　木村　保之

この本は、明治政府の国会開設直前の自由民権運動を、自由党と秩父困民党といわれた長野・群馬・埼玉の貧しい農民とのつながりや、困民軍として蜂起した彼らの様子を書いている。教科書ではたった数行のことなのだが、この本では当時の自由民権運動の様子を生々しく書いている。

まず秩父騒動の舞台となったところの説明である。この辺りは山に囲まれたところにあり、主に養蚕と米作が中心であった。そんな中でも政治に参加しようとする意欲が一部にあることに驚いた。『聯語海』と言う辞書は、当時の辞書では考えられない言葉、例えば保守・条約・塗炭之苦といった言葉がたくさん解説されているのである。

当時の秩父を物語る『木公堂日記』と呼ばれる資料で蜂起直前のことが書かれている。重税・徴兵・学校費の取り立てに農民の不満が高まっていく。明治17年10月、秩父困民党があらわれる。11月に困民党はとうとう一斉蜂起してしまった。この集団の形態は一揆の農民というよりむしろ軍隊に近かったという。高利貸しの打ちこわしが始まるが、困民党は隣の家に被害が及ばないように高利貸しの焼き討ちを行なったというから、農民の反乱にしては行儀がいいように思った。しかし、そのどさくさに紛れてただの放浪者が隊長を名乗って炊き出しをさせるとかの不可解な行動も目についた。

とうとう軍隊の反撃が始まった。秩父郡役所の占拠は３日で終わり、高崎鎮台を敵に回し、大宮から群馬山中谷、信州佐久へと敗走する。とうとう南佐久で困民軍は崩壊する。この辺りはあまり詳しく書かれていなかったが、先走った農民がいたとは書かれていた。

この反乱だけではないが、反乱鎮圧に一役買ったものに電信による電報が挙げられている。明治初年ごろに西南戦争をにらんで九州方面に電信線を引いていたとか、明治十年代は自由民権運動弾圧に電信が活躍したとか書かれている。民衆の血税を使って作った通信の手段が民衆のためではなく、専制政治の維持に使われていたことに憤りを感じた。

本当は、このような政治的な本の感想文を書きたくなかったのだが、歴史の裏が書かれているのを見ると少し面白いなと感じた。

「秀吉と利休」

（野上弥生子）

2M　濱本　寿彦

僕は、この「秀吉と利休」を読んで、とても勉強になった。

この本を読む以前は、豊臣秀吉と千利休が君臣であると同時に師弟関係であったということは知りもしなかった。まして、利休については、茶道を大成させた人ぐらいしか知らなかった。

秀吉と利休は、お互いになくてはならないものであったのではないだろうか。というのも、秀吉の利休に対する信任と傾倒は篤く、利休もまたよくそれにこたえて、茶事のみならず政治の分野でも、秀吉に奉仕する事が多かったからである。また、秀吉と利休はなんか親子みたいだとつくづく思った。

千利休の最後は、劇的なものだった。利休は、秀吉と師弟関係であり、茶を大成させた人であっただけに華やかな葬儀になるだろうと思っていた。ほとんどの人もそう思うのではないかと思う。しかし、利休の最期は切腹という思いもよらぬ劇的な死であった。切腹だけでもむごたらしいのに、一条戻橋のたもとで獄門にかけられるという、以前本当に秀吉に仕えていたのかと思わせるぐらい信じられないような転落の最後だった。こういう事になったのも秀吉が「唐御陣を討伐する」と言ったのを反対したためであるが、切腹をさせて獄門にかけるのは、少しやりすぎるのではないかと思う。反対されたのがそんなに嫌だったのだろうか。

秀吉は、天下統一をした自信に満ちて唐御陣も統一出来ると思ったのではないかと思う。しかし、最終的には利休の言った事が正しかったのではないかと僕は思う。秀吉が利休の意見を素直に受け入れていれば豊臣家の滅亡は延ばされたであろうと思う。

千利休の死は思いもよらない切腹という劇的な死であったが、それも桃山という日本のもっとも劇的な時代に生きたからではないだろうか。それも利休の運命だったと僕は思っている。

千利休という人物は、今日僕たちの生活に変わり浅からぬ茶道の大成者であり、僕たちの日常の文化に多くの影響を残している人物であると思う。

「悪魔の飽食」

（森村　誠一）

2E　宇都　孝行

僕は戦争を知らずに育ちました。他国では戦争をしているところ、また、内戦などで、殺されたりする人もあるとよく報道されますが、身近に感じないし、日本でそのようなことがないので、戦争を知るには、歴史の教科書やそれに関する本や映像、つまり戦争の記録を調べるしかありません。しかし、教科書などには、日本が受けた被害はよく載っているのに、未だに朝鮮中国の人々が日本を嫌っている原因になる、日本が他国に犯した残虐な行為に関する文章は、無いといってもいいのではないでしょうか。

この本では、満州第731部隊における、数々の虐殺行為の様子が元隊員の話や図、写真など膨大な資料に基づいて描写されていました。それは凄いなんてものではなくて、身震いし、涙がでてくるまさに生地獄です。事実とは思えないことが続々と書かれています。

第731部隊は、第二次大戦中、満州において細菌戦を研究していました。ペスト、コレラ、チフスなど様々な病原菌を武器にしようというのです。この研究には「マルタ」と呼ばれる、日本軍に捕虜となったロシア人、中国人、中には騙されてつれてこられた人などが人体実験の材料とされました。病原菌を注射されたり、後に解剖され、ホルマリンづけにされ、人間であって人間でない、材料として死んでいくしかなかったのです。また、アウシュビッツのような毒ガスも使用されたとあります。日に解剖されるのは2～3人、多い時は10人位も。一番読むに耐えなかったのは、1人の中国人の少年の話です。むりやり連れてこられ、麻酔がかけられ、そのまま臓器を生きたまま腑分けされたのです。ただ少年の健康な臓器が欲しかったからという理由で無理に。

結局、最終的には、部隊が殺した人々は、3千人を超えたそうです。現在では、想像するだけで恐しい実験が、戦争という狂気の沙汰か、ただの空想でなく、実際に人間になされたのです。膨大な量の人間に。

残虐殺人だけでも大きな怒りに値するのにまだ他にもあるのである。敗戦間近、ソ連軍の南下に危機を感

じた第731部隊はその行為の証拠隠滅を行った。後にアメリカ軍に生体実験の成果データを売り戦犯を逃れるようにしたのである。こうした人のうち、隊での手術技術を生かし、医学界の第一線で活躍している人もいるそうでまたこれも恐ろしい気がします。

確かに日本は、原爆を投下されたり、沖縄での戦いなど大きな被害を受けました。しかし、自分たちも同様に他国に対しての行為は事実である以上、どんな理由にせよ罪は罪だと思います。隠すのではなくて発表するべきだと思うのです。日本の被害者意識は醜いものがあります。

元隊員の一人が言うように、戦争というのがいやなもので、二度とやってはいけないとみんなが思うには隠してはいけないと思います。

「勝　　海　舟」

（高野　澄）

2E　山本　秀平

軍艦咸臨丸で太平洋横断をやった。この本を読む前は、海舟についてこのことぐらいしか知らなかった。中学の時も、ほとんど習っていない。これを読んで、海舟という人間が少しはわかり、いろんな事をやってきていることがわかった。

海舟は子供の時、剣の修業に打ち込んでいたが、ある時点で、蘭学の修業に転換していた。かなり熱心に蘭学を勉強し始めている。これは、西洋兵学を学びたかったからである。しかし、なぜ急に西洋兵学を学びたくなったのだろうか。他人からの勧めもあったが、海舟は、これに何か大きな予感を感じていたのではないかと思った。確かに、蘭学を勉強しなかったとしたら、海舟のそれからの人生が大きくかわっていたといえるだろう。

日本が1853年に開国して7年後に、勝海舟は艦長として軍艦咸臨丸に乗り込み、日本最初の太平洋横断に成功した。日本を出る日、運悪く風邪を引いていた海舟は、妻に「品川だ。ちょっと船を見てくる。」とだけ言って、そのまま乗船したということだ。人間の大きさがわかる。また、海舟は、日本は早く外国と国際関係を結んで新しい統一国家を作らなければならない。と考えていました。このように他の者より先にわかっていることが太平洋横断を成し遂げさせ、さらには、西郷隆盛との会談による江戸の無血開城をも成功させたのだといえるだろう。また、官軍と旧幕府軍の争いが大きくなれば、日本はそのすきに外国のきばにかけられることを、海舟は見通していました。その体の内には、本当の愛国心が燃えていたのではないだろうか。日清戦争が起こった時、71歳だった海舟は開戦に反対しました。これも、真の愛国心の表われだと思う。

海舟は死ぬまでに、国のために数々の仕事を果たし、国のために考え、国のためにいろいろな人と交渉し、成功している。このことからも、人間性というものがわかるし、頭もたいへんよかったのだと感じた。また日本の将来を見通して生きてきたといってもうそではないだろう。この時代にとても重要な人物だったと思う。海舟の一生は、人間は大きな物のために生きる意味を教えていると感じた。

政経

「軍　　魂」

（西村　建吾）

3M　橋本　勝人

この夏休み5年ぶりに鹿児島県の祖父母の所に帰った。そこは海沿いのたいそうな田舎である。祖父は昔海軍にいて戦艦に乗っていた。それでいろいろな太平洋戦争に関した写真や書物などを持っている。その中に『軍魂』という厚い本があった。この本は当時の日本の国力のことや、戦歴など、その他現在鹿児島に在住している元軍人の人たちのことが書かれてあった。

その中味はただただ日本の戦歴が書かれているだけで、よく他の本に書かれているような編集者の気持ちなどは全く盛り込まれてはいなかった。ぼくはそのほうがなんとなくいいように感じた。

また最初この本を見つけた時（なんとまあ堅苦しい『軍魂』などという題をつけたものだ。）と思った。扉を開いても、「こよなく祖国を愛し……今はなき戦友に捧ぐ」というような古めかしいつくりを思わせる始めの1ページだった。

しかし見ていくうちに今までに見たことのないような資料や写真などが多く、かえってこの古さを思わせ

るつくりの方が当時の様子が分かり易すかった。

それから読み進むうちに、鹿児島県の軍人の記録というのがあったので、ひょっとしたらと思ってページをめくると、やっぱり僕の祖父のことも載っていた。それによると祖父は〝海軍上等兵で、巡洋艦「出雲」に乗り組む〟と書かれてある。僕はよく以前から「じいちゃんは軍艦に乗っとったんじゃ。」と聞かされていたけど、小さい頃のことなのでよく理解できない話も多くあった。そういえば…。と思って聞いてみると、祖父は詳しく話してくれた。

その話の中で一番印象に残ったことが「ただ茫然と見るしかなかった」という言葉だった。祖父はやたらとその言葉を多く使った。祖父は実弟が眼前の海上で戦死していくのを見ている。その話の途中にもその言葉を使った。実際その当時の状況として、まさにその言葉どおりだったのだろう。国民は軍部の独走に対して、連合軍の攻撃に対して、やっぱりただ茫然としていたにちがいないと思う。しかしこれからの僕たちはそうしているようではだめだと思う。しっかり世界の状況を知って分別をつけて判断しなければ、またあのような戦争という悲劇を呼び起こすことになるだろう。僕たちの活躍する将来は、そういうことをもっと真剣に考えなければ、動かなくなってしまうのではないか、これはまったく僕らしだいではないのかと思う。

「日本経済学」

（石ノ森章太郎）

3M　安田　幸司

この本を読んだ中で、最も印象に残った土地問題について感想を述べてみることにしようと思う。

土地問題について述べるためには、まず最初に「含み資産（ヒドン・アセット hidden assets）」という言葉について説明しておかなければならない。「含み資産」とは、外国とは全く違う日本独特のビジネスルールのことであり、一言で言うと「土地」のことである。経済学者達の間では貿易不均衡は「ヒドン・アセット」が原因だと言っている者もいる。それではその「ヒドン・アセット」について、内容を深くさぐってみようと思う。外国の証券会社などは、日本の「ヒドン・アセット」のために伸び悩んでいる。日本は外国とは会計原則が異なっている。そのために外国では、日本独特のビジネスルールによって悩まされているのである。これに対処すべく、外国ではいろいろなことが行われているが、外国が、日本の「ヒドン・アセット」について興味を持ち、注意深く見られる様になった。つまり、日本も〝国際化〟が進んだということだろうと思う。これまで述べただけでは「ヒドン・アセット」についてまだよく理解できないので、具体例を挙げてみることにする。その具体例として造船について挙げてみると、造船が不景気になり、倒産寸前になって赤字をタレ流していても倒産しないのが、つまり〝含み〟の本質的なところである。いくら会社が倒産しても、土地は残る。だから企業は倒産しそうになると、その土地を担保に銀行から金を借りる。土地が値上がりすると、それだけ担保能力が増すということだから、さらに借り増しすることができる。その借りた金を元手にして会社をたて直すのである。このビジネスルールが日本独特のものであり、いわゆる「含み資産」と呼ばれるものなのである。

これまで述べてきたことからも分かる様に、日本の土地問題は激しさを増している。最初の方で少し述べたが、貿易不均衡は日本の「ヒドン・アセット」が原因であるという意見がでていたが、僕もその意見は正しいと思う。

欧米と日本とでは資産を評価する時の評価の仕方が違っていて欧米は時価が多いが、日本は買った時の価格そのままで評価していく。そのため、日本では土地を持っている者が、買った時よりも土地の価格が上がっていくのでそれを担保に金融から金を借りてそれを元に大儲けするというパターンがある。そして、日本の地価は他と比べて非常に高い。そのため、外資系の会社が来ても、日本にオフィスを持つのは難しい。しかし、日本から他へと進出するのは難しいことではない。そこから貿易不均衡が生じるのだ。

会計原則にしても世界で統一すれば、少しは貿易不均衡も改善できるのではないだろうか。日本は自分の国の利益ばかり考えずに、もう少し世界の動きに合わせた方が良いのではないだろうか。

「昭和の政党」

（粟屋憲太郎）

3E　大胡　圭一

この本を読んで一番心に残った人物は、民政党代議士の斎藤隆夫である。これからこの人の勇気ある行動とそれについての意見や感想をまとめてみよう。

この人物は、1940年（昭和15年）2月2日に、米内光政内閣に対し、第75議会での代表質問で、政府の支那事変処理方針を追及し、ひとたび戦争がおこれば、問題はもはや正邪曲直、是非善悪の争いでなく、徹頭徹尾力の争い、強弱の争いであって、八紘一宇とか東洋永遠の平和とか、聖戦とかいってみても、それは空虚な偽善であると演説し、これを原因に議会を除名されたのである。もちろん、この質問演説というのは、反軍演説であるが、この時代にこの様な事を言えることは、勇気のいる行動だったろうと思う。この様なことを言えば、周りはすべて敵となると分かっていながらも長い目で日本のことを考えたことで、すばらしい観察力をも備えていることが分かります。また彼の〝粛軍演説〟や〝反軍演説〟のことで国民からの激励の手紙がきていたことにも驚きました。僕自身このような人達からの手紙は、時代が時代だけに非難のものばかりかと思ったが、こういったまともで、人間が生きていく上で何が、どういった状態が幸せなのかを分かっていた人がもう少し多ければと思った。

彼はまた、議場での演説に政治生命を賭けるといった政治家であり、代議士は選挙区の代表ではなく国民を代表する政治家だという信念をもっていたことにもこの時代での政治家では最も正しい政治家だと思います。

選挙でも、名望家の集票組織に依存せずに地域の名望家に不満をもつ青年の手弁当により選挙運動を行うといった現在では考えられない強い意志を持っている人だと思いました。

そういった行動により、自分の意志を強く守り、人々の支持を得ていました。

現在では、リクルート事件等で政治自体が安定せず政治家としての本来の仕事を忘れてしまい、金と名声だけを求めている政治家が増えてきていると思うけど、この人のような正しい政治家を若いうちから育てていかないと現在の日本のように憂慮すべき政界になってくるのだと思います。

「中国の旅」

（本多　勝一）

3E　福田　善道

この本の題を見る限りでは、観光関係の本かと間違う程であるが、内容の面からいえば「日本軍による中国虐殺の旅」という題がふさわしいような本であった。戦時中の中国への日本侵略の歴史をたどったルポ形式のものであったのであらすじというものはなかったが非常に強烈で衝撃的としかその感想を語ることはできない。（本を読んだ2日間の夜うなされた程である。）政治・経済の授業でナチスがユダヤ人に対して行なった虐殺の記録を見る機会があったが、この本の語る事実は、まさにそれに匹敵する、いやそれ以上の残酷なものであった。例えば具体的に例を挙げて説明してみると、まず印象に残っているのが、人間の生体実験つまり健康な者をいきなり捕えてきてペスト等の菌を接種してその症状の推移をつぶさに調べ、なんと途中で生きたまま解剖してさらに研究するという行為である。これを行なったのは注目すべきことに医者であり、軍人ではない一般の人であった。この辺りに当時の日本の国を挙げての中国に対する態度が伺えるだろう。一般人であってこれであるから、中国に侵略していた軍隊は、まさに想像に絶する行ないをしている。本の中で体験した中国の人が述べていたが、焼き打ちや略奪は日常茶飯事で、人々は殺されなかったことを感謝したというぐらいであるからその激しさがわかるだろう。

特に目を引いたのは、日本軍の子供に対する扱いである。無抵抗で親を殺され、親にしがみついて泣いている子供を銃剣で突き殺してこともなげに殺したり、ひどいのには赤ちゃんを刺し殺しておいて銃剣に串刺しにしたまま、仲間と笑いながらかついで帰ったというのだからその人（果たして〝人〟と呼んでよいのだろうか）の精神を疑わざるを得ない。この他にもひどい話が数多くあった。少し疑わしい点があったというだけで3千人の人口を持つ村民を皆殺しにしたり（無抵抗な人々を1ケ所に集めておいて、まわりから機関

銃を乱射し、動かなくなった時点で人々の上から石油をかけ燃やしたのだ。）さらには人々を強制労働させるために何でもかんでも罪をでっち上げて逮捕したりしたようだ。（街で３人以上かたまっていると政治犯、米の飯を食べると経済犯、道を歩く時、きちんと頭を上げていれば思想犯といった具合）そしてその後の扱いが又ひどく、多くの体験者が語っていたが日本人は〝人間の命より鉱石が大事〟という態度をとっていて、例えば何か事故が起こった場合でも人の命など全くかまわず生産をつづけたりまさに人を人と思わない行動をとったようだ。挙げれば例はきりがなくそして上手に表現できない自分が憎らしくなってくる。大体において日本は戦争に対して〝被害国〟という顔をしている。そしてナチスの行なった虐殺に注目して〝彼らは人間ではない〟ということを平然と言うのであるがそういった都合の良い日本人たちに、僕は是非ともこの本を読んで良く考えてもらいたい。僕自身もこの本を読むまでは、日本はどちらかというと被害国であろうと思っていたが、この本を読んでそのような考えは全くなくなった。むしろ日本は最大の加害国であろう。勿論、戦争という問題については一国をとやかく言っても仕方がないのであるが日本軍の行なった行為をもっと日本人は率直に見つめるべきだと思う。アウシュヴィッツ展を開く前に日本軍による中国虐殺展を開くべきだと思う。そして皆が過去の事実を事実として受けとめるべきだと思う。そうすれば教科書等に厳然たる〝侵略〟を〝進出〟に書き換えようなどというばかげた考えもなくなるだろうし、多くの人がさらに戦争の悲惨さを身近な事として知るようになるだろう。

随想・読書雑感

「土木への序章」

―いつも通る路、渡る橋―

（田中輝彦著・鹿島出版会）

５Ｃ　横畠千恵子

この本を読んでとても自分のためになったと思いました。この本で発見した新しい知識は、これから先の自分にとって何かと役に立つことでしょう。

内容は、私達の日常生活の中にごく身近である，誰もがよく知っているような現象と、土木とがどういったつながりがあるのか、例えば、木の根元が太いのはなぜか。これは自然の摂理であるが、実際、力学的に見ても理屈に合った理想的な姿であり、この理屈は、家や高層ビルなどの壁が下階ほど厚く施工される理屈と同じである、などといった、ごくあたりまえのことだけど、何か新しい感覚で再認識できる本なのです。

専門的な内容ではないので、さらりと読み易く、読みながらおどろくほど身近な土木との出会いが楽しめる本です。

私がこの本から得た新しい知識の１つを紹介します。〝三和土〟聞いたことがありますか？今でも古い農家の入口に見ることのできる土間のことなのですが、この土間は〝たたき〟と呼ばれ〝三和土〟という字をあてます。この土間が固いのは、人が通るたびに踏みしめられるから固くなるのだと思っていました。しかし実は土間というものは字のとおり、三種類の材料（土と石灰と砂）を水で練り合わせて叩き固めたものだったのです。土間のつくり方など自分達の年代の多くの人が知らないことなのだろうと思います。実はこのたたきの材料の成分はセメントとほぼ同じなのです。あの重くて手の荒れるセメントは知っていても、そのセメントの先祖である三和土のつくり方を知らない、要は、セメントを買うことが出来なければ土を固めることも自分で出来ないということなのです。土間が身近にあるわけではないのですが、土木というのはもっと単純なところに、もっと素朴なところに存在していたのだなと思いました。力学的なこと、土木で使用される材料のこと、土木技術のこと、その他、請負に関することのような建設業のことまでが簡単に分かりやすく書かれているのでみなさんも一度読んでみられるとよいと思います。

都市のあそび場

５Ａ　松﨑　雅恵

都市において最も圧迫されている人々、それはこど

もたちではないでしょうか。お年寄りも圧迫されています、勿論若い人たち、おじさん、おばさんも何らかの影響を受けています。しかし、抵抗する術を持たず保護されなければならない筈のこどもたちが一番大きな影響を受けているのではないでしょうか。都市はこの小さい人たちから、彼らの居場所を、あそび場を奪ってしまいました。そして、それはこの小さな人たちの多くのものを狂わせているのではないでしょうか。

一般論では、こうです。「こどもはあそびの天才だ。どこでも、いつでも、こどもたちはあそびを発見することができるのだ。大人が与える遊具やあそび場なんて彼らの創造力を失なわせるだけのものなのだ。それ自体こどものあそびを奪っているのだ。」また、多くの人はいう。「公園でこどもなんか遊んでいませんよ。工事現場の水たまりなんかでこどもたちは夢中になっていますよ。」しかし、この論理は大人の都合のよい論理で都市の中からこどものあそび場を奪ってしまったのではないでしょうか。そんなこどもの遊べる水たまりも空地もないのですから。第一うるさい大人の目が許す筈がありません。

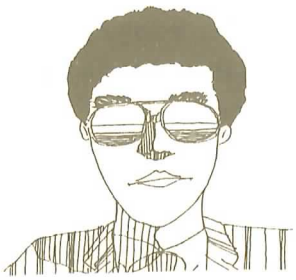
かつては、あそび場は地域の1/10くらいありましたが今は1/100もなくなりつつあります。昔のこどもたちは3haものあそび場を持っていたが今のこどもたちには3000㎡のあそび場しかない。しかも都心ではもっと数字は少なくなっている。時間もなく場所も友達もない。環境と共にあそびの方法も変化している。昔のこどものように自由奔放に遊べなくなっている。今、こどものあそび場はつくってやらなくてはならない時代なのではないだろうか。もっと大人が考えてやるべきではないだろうか。あそびの天才的能力をこどもたちが充分に発揮できるよう、彼らから奪ったものを今の時代にあったものに造りかえて返してやるべきではないだろうか。小さな人たちの場所、時間、友人、環境を返してやるべきではないだろうか。彼らにはもう何でも知ってるとなりのお兄さんも、おせっかいなおばさんも、強引なガキ大将もいないのである。だれも何も教えてくれない誘ってくれない。あそぶ時間もなく、居場所さえない。こんな環境をつくったのは誰でしょう。今の日本を支える40、50代の昔のこどもたちではないでしょうか。そして彼らは大人の都合のよい論理で片づけて積極的にこどもたちに20、30年後に自分たちを支えてくれるこどもたちに土地を確保してやろうともしません。そして、その上、今の子は無表情で、ぜいたくで精神的に貧困しているといいます。これは、こどもたちのせいなのでしょうか。かわいそうなのはこどもたちなのではないでしょうか。

機能的で安全性ばかり優先した大人の頭で都合よく考えた公園などではなく、こどものスケールにピッタリくる彼らの創造力や好奇心を満足させるような空間を積極的に確保し提供してはどうでしょうか。

新任者随想

事実のフレーム

機械工学科教官　上浦　良友



(by 5A　松崎雅恵)

1969年7月20日午後10時56分（日本時間21日午前11時56分）、我々「人類の代表」が初めて月に立った。当時、私もテレビに釘付けになっていた。それは、「最も強いアメリカ」が国の威信をかけた計画（アポロ計画）であった。あれから20年、今また宇宙の未知のベールが剝がされた。打ち上げから12年目にして、現時点で最も太陽系の外側に位置する海王星へのボイジャー2号の最接近である。連日のように、新聞やテレビでボイジャーから送られてくるデータが紹介されている。また、4年前のあの吉田監督率いる阪神タイガースが、今世紀最後の？リーグ優勝した翌年にハレー彗星が地球に大接近した。この時にも、欧州宇宙機関の惑星間探査機「ジョット」が、また、日本初の惑星間探査機である「すいせい」、「さきがけ」が彗星観測を行ない、我々にその正体を解き明かしてくれた。この20年余りの間に太陽系についての予備的な探査、

研究は終わったものと考えられる。

さて、このような宇宙ロマンは天文ファンならずとも興味を引かれるところであるが、これらの宇宙開発の歴史と事実をほんの少し別の方向から眺めてみよう。

アポロ計画以後の米航空宇宙局（ＮＡＳＡ）がとったプロジェクトは、惑星への有人飛行よりもスペースシャトルや宇宙基地計画を中心にした地球に近い宇宙空間の商業利用に移行している。周知のとおり、この背景には米国が抱える財政難がある。

７月18日に米商務省が発表した５月の米貿易赤字は季節調整済みの通商ベースで百二億三千七百三十万ドルと前月に比べ23.6％増大しており、また、５月の対日貿易赤字（季節調整前）は四十二億八千百三十万ドルと前月比10.0％増加している。この数字を見ただけでも、対日貿易摩擦は今後も益々厳しくなるであろう。

もっとも、このような日米間の貿易摩擦は今に始まったことではなく、70年代初頭以来繰返されてきている。当初、紛争の種となったのは繊維であり、米国内の繊維産業の低下と構造不況からくる失業者の増加を日本製品の一方的な輸出のせいだとして問題をすり替え、日本側に輸出規制を強要した。これは、現在においても、スーパー 301条なる報復法案を楯に日米構造協議に至った経緯と全く変っていない。しかしながら自国の産業生産性と国際競争力の低下を米国自身が十分に認識していながらも対日強硬策を打出してくる理由には、国内産業と労働者、失業者そして更には米国議会の厳しい突き上げがあることも事実である。

ＮＡＳＡではそのプロジェクトに対する予算がアポロ計画当時に比べ半減しており、アポロ計画以後今までのところ、地球外惑星への遠距離有人飛行は足踏を強いられてきたのである。

このように報道された１ショット毎の事実を読む場合、そのフレームの外側にも我々がややもすると見落しがちな事実のフレームが多くある。しかも、このような１フレーム〜が互いに有機的に結びついているのである。それは何も新聞やテレビで報道される事実だけでなく、学問、研究についても同じことが言えるように思える。

研究者は、目の前の様々な現象に対し仮説を立てるが、その仮説または理論は、具体的に実証していかなければならない。仮説や理論は覆っても、事実は決して覆えらないのである。

いっすんせんがん

図書係長　西本　　勉

(by 5A　松崎雅恵)

近頃〝出会い〟ということをしきりに考えることがあります。〝出会い〟というか〝きっかけ〟というかそういうことを大事にしなければ、と思うことが多くなってきたようです。

人との出会い、本との出会い、言葉との出会い、あるいは風景との出会い、など様々な新しい出会いを、知らず知らずのうちに求めているのかもしれません。

唐突ですが、「一寸千貫（いっすんせんがん）」という言葉を耳にしたことがありますか？私も、相田みつを著『人間だもの』という本の中で初めて知りました。次のように書かれています。「……一寸千貫 ── 大工さんから聞いたことばです　一寸とは約三・三センチ　千貫とは大体三千七百五十キロの重さのことです。一寸角（かく）の細い柱でも　真直（ますぐ）ならば千貫の重みに堪えるというのです（中略）生きる姿勢が真直ならば　どんな重みにも堪えるはず　一寸千貫だから ──（後略）」

昨年一年間に国内で刊行された書籍は、新刊だけで三万八千点にもなるそうです。年々増え続ける膨大な書物の中から、私たちは果してどれだけの、そしてどんな書物を目にすることでしょう。本屋で偶然手にするにしても、或いは誰かに薦められたにしても、それはまさしく、その本（つまりは著者）との出会いだと思います。「一寸千貫」も私がそうして出会った言葉のひとつです。

私事ですが、４月から本校図書館にお世話になって約半年がたちました。実は昔呉市内の高校卒業時に、公務員になろうとした際、最初に照会（引きあい）をいただいたのが呉高専でした。その時は、広島で就職したのですが、20年以上を経て今春転任して来ました。何かの縁と思わざるを得ません。

また現在の図書関係の仕事にしても、初めて就職した職場で最初に配属されたのが図書館だったのがきっかけです。大袈裟に考えれば、一つの出会いが人の一生を左右してしまうかもしれません。

いろいろな面で、より多くの、より良い出会いを持ちたい、と願わずにはいられません。

私の推薦する本

「建築　私との出会い Ⅰ・Ⅱ」

（彰　国　社）

建築学科教官　篠部　　裕

人には色々な建築との出会いがある。私の建築との出会いは何時であっただろうか。建築を専門として選んだ15歳の時ではなかった。また、残念ながら高専在学中の５年間にも、衝撃的な建築との出会いと言うものはなかった。本当の建築との出会いは、大学進学後の21歳の時であったように思う。

私は大学に進学して初めての春休みに、約１カ月間大阪の安藤忠雄建築研究所に建築の勉強に行った。この事務所を選んだ理由は、雑誌に載っていた一つの住宅作品（住吉の長屋：昭和55年日本建築学会賞受賞）に深く感動した為である。安藤忠雄氏は精力的に建築に取り組んでおり、その様は日本中にいや世界中に知られている。自分に非常に厳しく、所員にもまた非常に厳しい人である。この為事務所には常に緊張感が漂い、その緊張感の中から緊張感のある引き締まった建築空間が造られている。

安藤事務所では、定期的にこれまで設計した建物のメンテナンス（掃除、ペンキ補修等）が行われている。春休み等の学生の長期休暇に合わせて、学生を引き連れてメンテナンスに行っている。もちろんアルバイト料はでない。しかし、安藤忠雄氏の作品を見ることができる良いチャンスなので、10名くらいの学生はすぐに集まってしまう。

運良くこのメンテナンスの時に、事務所の人の粋な計らいで住吉の長屋を見せてもらう機会を得た。住吉の長屋は個人の住宅なのでこの様なことでも無い限り恐らく一生見られなかったであろう。見学できると聞いた時は嬉しくてたまらなかった。数日後大阪の住吉大社近くの住吉の長屋を訪れた。私は建築内部に入った時、今までにない新しい体験をした。興奮のあまり鳥肌がたったのである。建築を見て鳥肌がたったのはこの時が生まれて初めてであった。この貴重な体験が恐らく私と建築との初めての出会いであった様に思う。

また、大学院の１年生の時にフランスのマルセイユにあるル・コルビュジェの設計したユニテ（アパート）を見た時も同じ様な体験をした。その堂々とした建物の姿は、言葉では表現できない程素晴らしかった。その場で大声で叫びたくなる程であった。今まで建築を見て鳥肌がたった事は残念ながらこの２回しかない。この２つの体験が27年間での私と建築との出会いであった様に思う。私事で申し訳ないが私と建築の出会いを紹介させてもらった。

私の推薦するこの「建築　私との出会いⅠ・Ⅱ」は、一流と称される日本の建築家の建築との出会いが紹介されている。建築への熱い思い、大家の意外な一面、作品の秘密を解く鍵など色々な話が取り上げられている。まだ、衝撃的な本当の建築との出会いが無い学生にとって、この本は建築との出会いを見つけるきっかけを与えてくれる良い本であると思う。是非一度読んでもらって建築との出会いを学生の間（若い間）に見つけて貰いたい。

五百旗頭　真　著

「米国の日本占領政策　上・下」

（中央公論社）

一般科目教官　寺本　康俊

本書は、日米関係を専攻する著者が、第二次世界大戦中から戦後期を通して、米国の対日占領政策がいかにして形成され、実施されたかを分析、実証したものである。

米国政府の上部と下部、戦時外交と戦後計画、グローバルな戦後計画と対日占領政策、日本打倒戦略（軍事）と日本処理方針（政治）等を関連づけて論じ、また米国政府の決定を支え拘束する米国民の伝統的理念や世論にも言及している。

具体的には、既に戦時中から、ローズベルト、国務省内の知日派、そして米国軍部内の統合戦争計画委員会（ＪＷＰＣ）と、三者三様の戦後に於ける米国の対日占領方針が検討されていた。

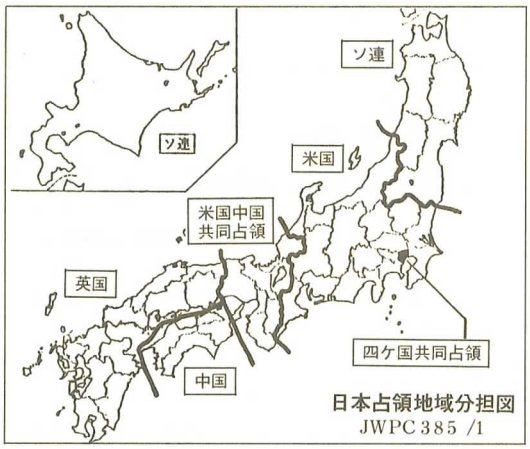
特に衝撃的であったのは、ＪＷＰＣ385－1という大部の文書の中に、戦後の日本を米国、ソ連、英国、中

国で分割占領しようとする計画案であった。これは米ソ間のテヘラン精神を基盤とし、米国兵の早期帰国を求める国内世論に即応してコスト軽減をすることを動機として作成された。

またスターリンもこの頃北海道北半分占領案をトルーマンに打診している。

ＪＷＰＣ385―1 は、日本にとって幸いにも国務省知日派（グルー元駐日大使、ブレクスリーやボートンらの大学教授等）によって、強く反対され、結局、トルーマンやその側近もスターリンの要求や米国軍部の分割案を斥けたのである。しかし日本も、一歩間違えば東西ドイツ、南北朝鮮の如く、二つに分断される危機にあったのである。

戦争が惹き起こすものとは、膨大な戦死者、嘆き悲しむ遺族だけではなく、残された国民をも二つに引き裂いてしまう残虐なものなのである。現在のドイツ、朝鮮半島の人々の悲しみは、たとえようもないものであろう。



日本占領地域分担図
JWPC 385 /1

四俵　正俊 著

「よくわかる構造力学ノート」

（技報堂出版）

土木工学科教官　西谷　庸雄

この本は、著者が愛知県の私立大学において過去10年余にわたる教育経験、および、ご自身の学生であった頃の体験に基づき執筆されたもので、そのポリシーは、構造力学(1)は、土木工学の分野では基礎の基礎であり、少しはわかってもらわないと卒業していただくわけにはいかない、また、独習によって把握できるような教科書でなければならない、とのことである。

体載は、この種の教科書としては版も大きく（Ｂ５）イラストや図がふんだんに載せてあり、例題・問題も各セクションのいたるところに出題され、かつ、懇切な解答がされている。最もユニークなのは、見開きの右の頁の文章がほとんど注釈にあてられていることで、先の独習による理解をさせるように考えられた工夫の１つであろう。また、同じ見開きの頁の欄外上段に現在１～10章のどこにいるかを示してあり、全体の流れの中のどの部分を学んでいるかが分かるようにしてある。

内容は、目次からして従来の教科書には無い分類・構成となっており、本文の記述も比較的平易になされている。また、前述の注釈が数多く掲載されており、それぞれが親切ていねいに解説されていることに好感が持てる。

とかく、むつかしい、わからないといわれる構造力学を今から学ぼうとする、土木工学科はもちろん建築学科の学生や、あるいは、「試験問題を解く」ことのみに目が向いて、「学んでいることの内容を理解する」ことへの関心が薄い、現在学んでいる学生に一読を推める本である。

参考：「よくわかる構造力学ノート」まえがき

Ｒ.Ｐ.ファイマン著　大貫昌子訳

「ご冗談でしょう、ファインマンさん」Ⅰ・Ⅱ

（副題：ノーベル賞物理学者の自伝）
（岩波書店）

機械工学科教官　林　　武美

偉大な人物の伝記というものは、いつも感動を覚えさせられるものだが、とにかくこれは文句なしに面白い本である。ファインマン（1918年～1988年）は米国の理論物理学者で、1965年にシュウインガー、朝永振一郎とともに量子電気力学のくりこみ理論の完成の仕事でノーベル物理学賞を受賞しているが、素粒子論を中心に超流動等の物性論他に及ぶ幅広い分野にわたり、この上なく個性的で独創的な研究を行った現代物理学の巨人である。ファインマンは、物理学者としての学問上の偉大さだけでなく、その類い稀な自由で魅力ある人間像によって、彼を知る多くの人々を惹きつけている。

彼の親しい友人であるラルフ・レイトンが７年にわ

たり彼から話を聞いてまとめたのがこの自伝である。日本語訳の副題は最初に記されている通りだが、原著の副題は“Adventure of a Curious Character”（好奇心に富む人間の冒険）である。まことに、「謎といえば是が非でも解かずにはいられない、ほとんどどうにもならない執念、人をあっと言わせるような茶目っ気、見せかけや偽善に対する憤慨、……など、まさに彼の面目躍如たるもの」（ヒツブスの序文より）が、この本で語られる数々の思い出の中にあふれている。「法外でしかもショッキングだが、それでいて非常に暖かく人間味のあるこの本は、実にすばらしい読みものである。」（前出ヒツブス）。ファインマンをファインマンたらしめる最大のもの：彼の物理学：についてはこの本には殆ど書かれていないと言ってよいが、幼ない頃のラジオ直しに始まり、この本の題名の生れたプリンストン時代の話、原爆研究に参加していたロスアラモス時代の思い出、金庫破りの奇妙な趣味、ブラジルの本場で立派に通用したドラムたたきの腕前、酒場の女の子との付き合い方の話、ヌードを得意とする絵の趣味、マヤ象形文字の解読等々、この本に書かれた数多くの話全てが、彼の豊かな人間像を浮かび上がらせるものである。

ところで一方、この本にはファインマンの物理学者ひいては科学者としての誠実さと「科学への真摯な情熱を伝える」（カバー見開きより）もの、また学問や教育に関して大変教訓的なこと、が随所に見出される。ＭＩＴに学んだ彼が、大学院もＭＩＴに進みたいと述べた時、指導教授のスレイターが、「(いいや、)外の世界がどんなものか見てくる必要がある」と、彼をプリンストンへ送ること。そしてこのすすめが賢明であったことを彼自身実感し、「若者はすべからく広い世界に出て、外を見てくることだ。事物の多様性を知ることは大切なことだ」と、自分の学生たちにも忠告するようになる話、また、雲形定規の接線にからんだ話で「人は皆、物事を『本当に理解する』ことによって学ばず、たとえば丸暗記のようなほかの方法で学んでいるのだろうか？これでは知識など、すぐ吹っとんでしまうこわれ物みたいなものではないか。」と述べている項、さらに教科書選定の委員の仕事をひきうけ、教科書を一冊残らず読みその中味のいい加減さに憤慨するとともに、他の委員が殆どまともに教科書に目を通していないことに憤慨する話、ブラジルの科学教育に対する痛列な批判、等、貴重なことを教えられる。中でも、本の最後に加えられているカリフォルニア工科大学卒業式での式辞「カーゴ・カルト・サイエンス」(積み荷信仰式科学と訳し、彼がえせ科学を指すのにつけた名前）は、読者に深い感銘を与えるだろう。この式辞で彼は、世に科学的と言われている方法や学問の中に見せかけばかりの科学があることを語っている。「このえせ科学は研究の一応の法則と形式に完全に従ってはいるが、……何か一番大切な本質がぽかっとぬけている」ものである。そしてそこに必ずぬけているもの、「それは一種の科学的良心（または潔癖さ）、すなわち徹底的な正直さともいうべき科学的な考え方の根本原理、言うなれば何ものをもいとわず『誠意を尽す』姿勢」である。彼はこのことを、ネズミを使った心理学の実験の具体例をあげながら明らかにし、学生たちに「決して自分で自分を欺かぬ」ようにと望み、「研究費だの地位などを保ってゆくために、心ならずもこの（科学的）良心を捨てざるをえないような圧力を感じることなく、……そのような意味で自由であれかし」と祈るのである。是非一読をすすめたい。

○「図書室では静粛に」

○「読んだ本はもとの位置へ」

○「帯出期間を守ろう」

○「図書室での飲食はやめよう」

○「脱いだスリッパはゲタ箱へ」

新着図書30選

〈人文・社会〉

◇ヤニナ・ダヴィド著　松本たま訳

「ゲットーの四角い空」（未来社）

平和なユダヤ人一家から家と両親と自由を奪われナチに追われることになった少女ヤニナの逃走記（宇根記）

◇富田虎男著

「アメリカ・インディアンの歴史　改訂」（雄山閣）

アメリカインディアンの正当な歴史的役割を評価し、勝者のつくりあげた歴史像の虚偽を究明する（宇根記）

◇服部孝彦著

「アメリカへ帰りたい！－日米異文化衝突戦争」（日本図書ライブ）

帰国子女である著者による生々しい生活体験談である。アメリカで受けたカルチャーショックより、帰国して受けた逆カルチャーショックのほうがはるかに強烈であると述べている。（川尻記）

◇「漢字百話（シリーズもの）」（大修館書店）

「女の部」「魚の部」のように、部首ごとに漢字をまとめ、文字の成り立ちや語源をわかりやすく解説。写真も豊富で楽しく読みながら知識として身につくシリーズものです。（枡本記）

◇田中二郎〔ほか〕編

「戦後政治裁判史録　全５巻」（第一法規出版）

戦後に於ける93の裁判事件を解説している。政治裁判事件を通して、戦後の政治・社会・法律を考察できる。（例）帝銀事件、下山事件、八海事件、造船疑獄事件、安保騒動、狭山事件、サリドマイド事件、長沼事件、三島由紀夫事件、ロッキード事件等。（寺本記）

◇日本経済新聞社編

「ゼミナール日本経済入門」（日本経済新聞社）

金融、物価、景気、産業構造といった日本経済の基礎知識のほかに、貿易摩擦、財政危機、日本的経営等の応用問題について解説し、日本経済についての基本、最新情報がわかる。（寺本記）

◇ジリ・ミュシャ著　島田紀夫〔ほか〕翻訳監修

「アルフォンス・マリア・ミュシャ　生涯と芸術」（三省堂）

ガウディの幻想的とも言える建築もそうであるが、アール・ヌーヴォーの絵画・彫刻・工芸が見直されて久しい。ミュシャはパリの舞台女優、サラ・ベルナールのポスターを書いた人として有名ですが、この本はその娘、ジリが著した画集で、父の生涯の作品のほとんどを載せている。（岡本記）

〈自　然〉

◇佐藤義雄著

「入門グラフィックス」（アスキー出版局）

本書は、コンピュータ・グラフィックス（ＣＧ）のアルゴリズムを、具体的に分りやすく解説してあります。しかもＢＡＳＩＣで書かれたリストも掲載されていますので、これからＣＧを勉強したいと思っている人には、きっと役に立つ本だと思います。（岡中記）

◇都筑卓司著

「10歳からの量子論」（講談社）

半導体、レーザー、超伝導等の現代科学技術の発展は、量子論なしには考えられない。一般常識からかけ離れたように見える難解な量子論を、数々の天才物理学者達のエピソードを交え、楽しく解説した好書。（笠松記）

◇大塚泰一郎著

「超伝導の世界」（講談社）

オランダの物理学者カマリン・オネスによって発見された超伝導現象。液体チッソでも超伝導を示すことが発見されて以来、世はまさに高温超伝導ブーム。この本は教養図書でありながら、超伝導のメカニズムを豊富なイラストで詳しく解説した絶好の書（笠松記）

◇北原文雄、竹内敬人著

「化学の法則45話」（講談社）

法則の歴史、意義、応用等を解いている。質量保存の法則からフロンティア軌道理論まで、少し程度の高い所もあるが、化学の重要な法則や理論を取り上げ歴史的発展、意義実際的応用等を平易に解説。（茶木記）

◇渡部　仁著

「微生物で害虫を防ぐ」（講談社）

化学殺虫剤の環境破壊が問題になるとともに、無公害で安全性も高い微生物殺虫剤が注目されてきた。微生物について理解を深めながら、害虫防除への利用法などやさしく解説している。（茶木記）

〈機　械〉

◇ニューセラミックス懇話会編

「セラミックスの超精密加工」（日刊工業新聞社）

セラミックス加工は加工技術として重要なことになってきた。本書はセラミックス加工の基礎、精密加工技術、精密測定などの実施例を中心に理解しやすくまとめてある。（大下記）

◇江村　超著

「メカトロニクス入門」（日刊工業新聞社）

メカトロニクス的発想は今後の機械設計において極めて重要であるが、本書はメカトロニク的設計に使われる方式や、各種要素の基礎的知識とその応用についてまとめたもの。（大下記）

◇金属チタンとその応用編集委員会編

「金属チタンとその応用」（日刊工業新聞社）

新しい材料の開発がいわれている現今であるが、本書は超電導材料、形状記憶合金として開発が著しいチタンの基礎的事項から各種の応用について記述している。（大下記）

◇L・T・C・ロルト著　磯田浩訳

「工作機械の歴史」（平凡社）

工作機械の考案者や改良家が、今日の機械文明社会を築くかげの力としてどれほど大きな役割をはたしてきたかということを、詳細な歴史的事実をもとに明らかにしている。（河野記）

〈電　気〉

◇寺野寿郎〔ほか〕共編

「応用ファジィシステム入門」（オーム社）

ファジィ（Fuzzy）とは羽毛のようにふわふわして境界が不明確なあいまいさのことである。言葉の持つ意味など本質的にあいまいである。（“1”・“0”で規定されない）。あいまいさをどのようにモデル化し、工学に役立てることが可能か、多くの実例によって教えてくれる。（加藤記）

◇那野比古著

「ニューロコンピュータ革命」（講談社）

プログラムはまったく不要で、自己組織化能力により自ら学習、記憶していく力をもつ、従来のコンピュータの概念を打ち破るニューロコンピュータについて、その位置づけ、その実現法、利用法を述べている。（脇所記）

◇P. L. KNIGHT〔ほか〕著　氏原紀公雄訳

「量子光学の考え方」（内田老鶴圃）

光量子は電気磁気現象の基本的な粒子である。量子物理や波動光学は現代のエレクトロニクスの世界では日常茶飯事として現われる。その現象の基本的考え方・見方を教えてくれる本です。（山崎記）

◇安達三郎、大貫繁雄共著

「電気磁気学」（森北出版）

電気磁気学を学習する初心者に理解し易く書いてある。ベクトル解析を使っていないからそれだけ読み易い。例題も代表的な問題を取り上げ、丁寧に解説している。演習問題が豊富にあるから、できる限り解いてみるとよい。（原田記）

〈土　木〉

◇近畿高校土木会編

「考え方・解き方　土質力学　第2版」（オーム社）

本書は工高、高専、大学、現場初級技術者に幅広く活用できるよう、内容の説明をはじめ、やさしい問題から少し高度な内容まで多数の演習問題を反復して学習することによって土質力学の知識や計算力が自然な形で習得できるようにした親切な入門書。（推薦石井）

◇国際交通安全学会編

トランジットモールの計画」（技報堂）

上記学会の自主研究プロジェクトであるトランジットモール研究会の成果に基づくこの本は、世界のトランジットモール実施都市の実情を紹介し、日本のトランジットモール適地の調査と選ばれた対象都市でのイメージプランをまとめている。（推薦藤原）

◇大北忠男著

「環境工学概論　新版」（朝倉書店）

環境工学の基礎知識を提供するものとして、大気汚染、水質汚濁、廃棄物、土壌汚染、騒音、公害振動、規制基準と環境基準等の各項目を、演習問題をも含めてわかり易く説明している。（推薦大橋）

◇岡　並木著

「舗装と下水道の文化」（論創社）

1980年に朝日新聞に連載された「土と水と人間」を基に筆を加えられたもので、舗装と下水道の歴史・現在・課題・文化について豊富な取材と適格な視点によって書かれた読み易く興味深い本。（推薦西名）

〈建　築〉

◇藪野　健、三浦朱門著

「明治建築の旅」（新潮社）

藪野健氏の、主に水彩による華麗なスケッチによって凝洋風とか、和洋折衷などの様式による木造、レンガ造の明治建築が次々と紹介してある。巻末には、犬山市にある博物館明治村のガイドブックも添えてあり、楽しんで見れる本である。（岡本記）

◇谷山　光〔ほか〕作　木村芳子絵

「マンガ建築構造力学入門　1・2」（集文社）

最近は「活字離れ」という傾向から読書する学生も少くなっているようである。マンガ文化に育った事がその大きな原因の1つではなかろうか。そんな学生にはマンガで専門を勉強するのも良い方法であろう。本書は建築構造力学をわかりやすくマンガで説明している。

（篠部記）

◇吉村元男著

「都市は野生でよみがえる」（学芸出版社）

都市に自然は必要だが、大自然の生態系をそのまま持ち込むのは無理な話。全てが人工物で構成される都市における自然とは、人間と自然との関係から考えなければいけない。現在の醜悪な都市を野生の自然を軸に魅力あふれる都市へと改造する方途について述べる。

（西名記）

◇横内憲久〔ほか〕著

「ウォーターフロント開発の手法」（鹿島出版会）

「大川端計画」、「みなとみらい21」、「神戸ポートフイランド計画」などウォーターフロントへの関心は高まりつつある。そんな中で、開発の本質、街づくりの要素、基本的姿勢について、実施例を紹介しながら述べている。（藤井記）

〈共　通〉

◇長濱卓治著

「ＡＶ空間の設計」（講談社）

「オーディオは、真空管からトランジスター、モノーラルからステレオ、オープンリールからカセット、レコードからＣＤ、アナログからデジタルへと時代とともに移り変わってきた。……」発行は2年前で内容が若干古いが、ＡＶ機器をどう組立てるかを思案する際に大変参考になる。（岡本記）

◇日本トイレ協会編

「世界の公共トイレ事情」（地域交流出版）

人間の最も基本的行為である「排泄」とか「トイレ」は、国によって様式や考え方に大きな違いがある。本書は世界のトイレ情報（街中での場所、待ち方、ペーパーかその他を使うか……）を集め、トイレを通して文化を紹介している。（藤井記）

◇加藤万里子著

「新・100億光年を翔ける宇宙」（恒星社厚生閣）

宇宙の広さに感動し、夢のような数値を見るにつけ、科学技術の進歩に感動させられる。人生に悶々としている悩み多き若者にとって、ものの考え方を変える契機となるかもしれない本である。（若宮記）

◇丸本百合子〔ほか〕著

「はたらく女の母性と健康」（労働旬報社）

女性の産婦人科医と弁護士によって書かれたこの本は、異常に長い日本の労働時間や、非人間的になっていく労働現場を、働く女という鏡に映して糾明し、改革への提言をする。男性にも読んで欲しい本である。

（脇所記）

◇池田光男著

「眼は何を見ているか」（平凡社）

眼はどのように文章を読み取り、色を識別するなどの情報を処理しているのだろうか。カメラのフイルムと違い、不均一性が特徴の網膜を中心に話を展開。色の見え方など色覚のメカニズムを探っている。

（脇所記）

◇厚生省編

「喫煙と健康」

喫煙が健康に及ぼす深刻な影響や、各国の禁煙対策などを体系的にまとめたレポート。男子の喫煙率が、世界でも有数の高さにあるわが国は、国民の理解にもとづく喫煙対策が急務になった。（脇所記）

◇吉岡紗千子著

「ロックよ、静かに流れよ」（径書房）

いわゆる「ツッパリ」少年と、その仲間たちの心の軌跡を描いたもの。子どもを理解するとはどういうことかを体験に語らせて感動的だ。それはやはり子どもと共に生きることなのだ、と納得させられる。

（脇所記）

海外だより

イギリス

土木工学科　藤原　章正

国際会議に参加するため、3月中旬から4月初旬にかけて、英国に行ってきました。初めての海外ということもあって、強烈な印象が今でも鮮明に残っています。滞在地のブライトンやロンドン、スコットランドほかで体験した事、感じた事を列挙します。

1．ブライトン

4週間滞在していたのは、ロンドンからまっすぐ南へ約85kmのところにあるブライトンという街です。イギリス最大の海辺のリゾート地で、夏には海水浴客でにぎわいます。観光施設が整備されていて、国際会議などもよく開かれる所です。

ブライトンの街

経費を抑えるため、一般家庭にホームステイしていました。1棟が半分に仕切られて2世帯が生活するセミディタッチト・ハウスで暮らす、イギリスの典型的な中流家庭でした。幸い日本人を始め多くの外国人を受け入れている家庭で、英語を満足にしゃべれない私のような者の扱いになれていたため、気楽に生活することができました。しかし、夕食後の家族だんらんの時間が長く、2～3時間も家族でテレビやビデオをみながらしゃべり続けるため、1週間もすれば、用意したみやげ話もつきてしまって、近くのパブによく出かけたものです。

ホームスティ先の家（セミディタッチト・ハウス）

生活は日本より幾分質素で、光熱費が高いため、風呂は2日に1度シャワーのみという生活でした。

海岸線の砂浜がとても美しくて、ベンチの並ぶ海辺の公園がこの街の最もお気に入りの場所でした。

心安まる海岸線（ブライトン）

2．語学研修学校

初めの3週間は、午前中はＥＬＣという語学研修学校に通い、午後や週末などはオックスフォード大学のＴＳＵ（交通研究所）に通ったり、ロンドンのコンサルタントに行ったりしていました。イギリスでも大学の教授連中は、週末も忙しくて仕事に励んでいる様子。少しほっとしました。ＥＬＣには、日本人の高校・大学生が多く、ドイツ、デンマーク、スペイン、タイなどからも、社会人や学生が来ていました。

プレイスメントテストで Higher Intermediate（中の上程度）のクラスに配属されました。10人くらい（日本人の学生は欠席が多く、正確な人数ははっきりしない）のクラスで、西ドイツの夜間大学の学生2名と

保母さん、デンマークの80才になる老人の４名が西洋人です。あとはタイの高校生２人と日本人の高校・大学生という構成でした。

研修の内容は、基本的な会話や文法に関することが多く、とにかく英語で話すしかないということ以外は、日本の英会話学校とあまり違いはないように感じました。

最高の収穫は、ドイツやデンマークの友人ができたこと。特に、カウという名で呼ばれていたデンマークの老人は、独学で学んできた英語を試すためにやってきたそうで、その向学心には感動さえ覚えました。「これがラストチャンス」といっておどけてみせた笑顔が忘れられません。

それまで学生のふりをしていたのですが、プレイスメントテストの面接で、皆に高専の教官だということが知れてしまって、以後はドイツ人と日本人の学生たちに先生といっては頼られて、後で大変な責任をかぶる羽目になってしまいました。いずれにせよ、丁度、高専の学生諸君と同じような年齢の学生たちをみていると、すばらしい体験だなと強く感じました。機会があれば、是非、安全な国イギリスで見聞を広めていただきたい。

３．経済大国、日本

買物、食事、ディスコ。日本人学生たちの行動をみていると、ドイツの学生は非常に質素に映ります。彼らと一緒に昼食を取ることが多かったのですが、事実、食事は非常に簡素です。日本人と同じ店で出くわすことはあまりありませんでした。いい店を紹介してくれと言っては、私の後ろについてくるのですが、入ろうとすると高いと言って、結局いつものサンドウィッチ店かいわゆる学食に落ち着いてしまいます。

ある日本人の学生が、イースターの祭日にパリに行きたいと言うので、チケットを見つけるために半日奔走させられたことを話したときなど、日本人の若者はいつもそんな大金をもっているのかとびっくりしていました。私の愛車ホンダ（ホンダといえばアコードのことらしい）は、ドイツでは高級車だといって絶賛してもいました。

反面、政治や戦争、歴史などについて友人同士で語り合う機会が多いそうで、各自が建設的な考えや意見を持っていました。とりわけ語彙力に乏しい私は、この種の会話の際は、いつもたじたじでした。

経済大国、日本について、少々考えさせられたものです。

４．イースター小旅行

そうは言うものの、私もやはり日本人。イースターの４日間、スコットランドに出かけました。でも決して贅沢な旅ではなく、行きはコーチ（長距離バス）、帰りは夜行電車のセカンドクラスの強行軍でした。

渡英する前は、それなりに目的を持って、綿密な計画を立てていたつもりなのですが、イースターのことなど考えもしていなかったものですから、ホストファミリーに、“留守をするからどこか旅行でもするよう”言い渡されたときは慌てました。

なんとかスコットランド行きのコーチのチケットを手にいれて、出発できたのですが、渋滞にかかってしまってエディンバラに到着したのが夜の11時。とにかく宿を求めて電話でホテルを捜します。

Do you have a room tonight?

スコットランドの人々の発音は、訛りがきつくて、いっこうに聞き取れません。相手が何を言おうがこのフレーズだけで押し通して、Yes か Noだけを息を殺して聞くしかありません。こんなありさまですから、７軒か８軒目にしてやっと空いたホテルを見つけることができました。その間の長かったこと。この旅にも東京の大学生と高校生がついてきていたのですが、このときばかりは一緒でよかったとつくづく思いました（後で分かったことだが、実はこの高校生、アメリカに留学したこともあるgood speaker だった）。

５．スコットランド

こんな痛い思いは２度としたくないと、翌日からはとにかくその日のホテルを捜すのが、我々の最大の仕事でした。幸い英語のできる高校生が電話係を担当してくれたので、比較的スムーズに宿は見つかりましたが、今度は移動の交通手段が大変でした。イースターの間は、ＳＲ（日本でいうＪＲ）の職員も休暇を取るため、電車がほとんど止まってしまいます。

ネッシーで有名なネス湖のあるインヴァネスまで行くコーチを、どうにか見つけたのが昼過ぎで、出発までの４時間あまりをエディンバラ観光に当てることができました。言葉はうまく聞き取れませんが、人々が

非常に親切で、日本人と分かると気軽に話しかけてくれるし、道に迷っていても必ず近くの人が案内してくれました。

美しい景色もさることながら、外国人に慣れているブライトンやロンドンと違って、暖かさのある人情に触れることができて、スコットランドは素晴らしい国でした。

ネス湖のほとり（インヴァネス）

6．安くて快適：Bed & Breakfast

英国のB&Bについては、旅行雑誌などで有名ですが、噂に違わず安くて快適で、このイースターの間はすっかりお世話になりました。名前の通り１晩泊まって朝食つき、£10（≒2300円）でした。日本ではユースホステル程度の料金ですが、部屋はビジネスホテルくらいで、朝食もまずまずです。田舎の方がより安くて親切なので、有名な観光地の隣町などで見つけるのが得策です。ただし田舎に行けば訛りがひどく、電話での予約にはくれぐれもご用心を。

スコットランドのB＆B

7．リコムファーム事件

旅行雑誌などに心得の１つとして、必ず書かれているのが、帰りの航空券の再確認（リコムファーム）です。この再確認をめぐってのトラブルにはまいりました。

富山からきた高校生が、リコムファームをしてほしいと頼んできたので、滞在もすでに３週間近くなり幾分英語に自信もでてきた頃でもあって、よせばいいのに引き受けてしまいました。

今考えると事は簡単。航空会社の手違いで予約していたはずの飛行機が取れず、別の便に変更しなければならなくなったわけです。外国ではよくある話とか。

しかし、航空会社に電話をかけて、チケットはないと言われたときは、さすがに気が動転してしまって、本人は泣くばかりだし、この子は日本に帰れないと本気で考えていました。英語がうまく通じていないのが原因かと思ったり、日本人だからからかわれているのだと考えたりで、とにかく安請合いした責任上、仕方ありません。

日本との時差が８時間（イースターの間にサマータイムに変わりました。そういえば、このことに気づかず、危うくコーチに乗り遅れそうになるということもあった）。深夜２時まで映画館や踊れもしないのにディスコで時間をつぶして、東京の旅行会社が開店するまで待って、電話をかけることにしました。

東京につながって日本語でなんとかなると聞かされ、やっと我を取り戻した時、改めて自分の英語力の乏しさを認識しました。

8．mustn't と cannot

1970年代初めの欧州では、それまでの「歩車分離」の考えとはまったく逆の、「歩車共存」の政策がとられるようになりました。日本では今でも歩行者は交通弱者と認識されていますが、欧州では20年前から自動車と歩行者は対等だと考えられてきたわけです。その弊害でしょうか、次頁の写真のように歩行者はほとんど交通信号を守りません。老いも若きも紳士も淑女も誰一人として赤信号で止まりません。しかも堂々と横断します。

このことについて、オックスフォード大学のジョーンズ博士に問いただしたところ、「日本ではmustn't かも知れないが英国ではcannotだ。我々は自分の判断で行動している。」とのこと。要するにすきあらば渡れです。その代わり、人身事故の場合、自動車側にほぼ全面的に責任が問われる日本と違って、歩行者にも重い責任が科せられるそうです。

“赤はワタレ！？”

9．TRAFFEX ’89

国際会議は、最後の週にブライトンのメトロポールエキシビションセンターで開催されました。

交通信号の制御や駐車場の誘導案内システム、パーキングメーターなどの最新の機械などが展示されている展示会場と、交通管理計画の学術的なテーマを掲げた会議場には、多くの国々から、行政担当者、企業の開発チームのスタッフ、大学関係者が多数集まっていました。

今回の最大の目的は、国際会議の雰囲気を肌で感じることと、英語力を試すことでした。前者の目的は、十分達成することができ、7月に横浜で行われた国際会議の論文発表に大変役立てることができました。一方、後者の方は、それまで3週間の身を削るような体験ですっかり自身を失っていた上に、駄目を押されるものでした。とにかくスピーチが速くて、巧みに取り入れられているジョークにさえついてゆけず、笑い声の和やかなムードの中でも、しかめっつらをして真剣に聞こうとしているのは私だけでした。特に質疑応答で白熱してくると、お手上げの状態でした。

10．Regulation か Deregulation か

交通計画の分野で、ここ数年来、Deregulation（規制緩和）という言葉が流行しています。私の出席した会議でも、規制か緩和かが1つのテーマに取り上げられていました。

Deregulationとは、例えば航空機の運賃設定を自由にしたり、バスの運行許可を自由にしたりすることによって、交通サービスの向上を図ろうとする交通政策です。このような動きは英国をはじめ欧米では早くからありましたが、わが国では最近になってやっと適用されるようになってきました。広島から東京までの夜間高速バスなどは、利用者数もまずまずで、Deregulation の成功例といえます。

しかし長期的にみると、特定の会社の独占や競合路線の乱立などによって、逆にサービスの低下を招く危険性も高く、是非についての明確な結論は今のところ下されていません。

このようなテーマを取り上げた議論が、今後わが国でも益々盛んになってゆくものと思われます。

タクシーの運転手に“R”の発音が悪いと10分間あまりレッスンを受けたり、故障しているとも知らず公衆電話と奮闘したり、数え切れないほど失態を重ねる日々でしたが、言葉で説明できないほのかな自信が何よりも大きな収穫でした。

○「図書室では静粛に」

○「読んだ本はもとの位置へ」

○「帯出期間を守ろう」

○「図書室での飲食はやめよう」

○「脱いだスリッパはゲタ箱へ」

お　知　ら　せ

昭和63年度　図　書　統　計

1．利　用

（　）内は前年度の合計を表す
開室日数 281日

(1)　貸出人員・冊数

学生（人員）

年＼科	機械工学科	電気工学科	土木工学科	建築学科	合計
1	136	208	115	154	613
2	47	460	141	204	852
3	72	675	232	112	1,091
4	168	554	84	386	1,192
5	186	923	40	284	1,433
合計	609	2,820	612	1,140	5,181

(4,523)

学生（冊数）

年＼科	機械工学科	電気工学科	土木工学科	建築学科	合計
1	191	291	161	215	858
2	66	644	198	286	1,194
3	101	945	325	157	1,528
4	235	776	117	541	1,669
5	261	1,292	56	397	2,006
合計	854	3,948	857	1,596	7,255

(6,804)

教職員（人員・冊数）

人冊＼区分	教官	事務	合計	
人員	152	119	271	(221)
冊数	279	247	526	(457)

(2)　入館者数

学生	教官	事務	合計
37,296	164	142	37,602

(37,912)

2．蔵　書

平成元．3.31現在

区分＼分類		0 総記	1 哲学	2 歴史	3 社会科学	4 自然科学	5 工学	6 産業	7 芸術	8 語学	9 文学	合計
図書	和書	4,743	2,347	5,042	5,035	8,512	20,121	448	2,181	2,597	5,675	56,701
	洋書	448	466	129	217	926	2,774	4	41	1,322	1,261	7,588
	合計	5,191	2,813	5,171	5,252	9,438	22,895	452	2,222	3,919	6,936	64,289
学術雑誌	和雑誌	148	8	13	54	44	258	3	22	16	10	576
	洋雑誌	11	8	1	1	23	128	1	2	37	4	216
	合計	159	16	14	55	67	386	4	24	53	14	792

注）図書は冊数、学術雑誌は種類数を表す。

図書（62,718）
雑誌（　782）

3．文献複写依頼統計

	国立大学			JICST	国立国会図書館		その他	合計	
	電子式	マイクロフィルム	コンテンツ		電子式	マイクロフィルム			
件数	79		13	6	1		5	104	(110)
枚数	693		90	144	22		3,427	4,376	(1,934)

▶時間外閲覧（夜間開館）実施◀

図書室では、平成元年４月11日より、下記の通り時間外閲覧（夜間開館）を実施しています。（担当者は、橋田さん・浄泉さんの女性おふたりです。）

１．趣旨

本校図書室では、開室時間を延長することによって学生の学習意欲及び学力の向上と教養の深化を図り、教職員の教育研究活動の進展に資するため、時間外閲覧業務（以下「夜間開館」という）を実施しています。

２．夜間開館時間

平　日　17：00～20：00

土曜日　12：30～16：30

ただし、次に定める日は実施しません。

(1)　学則に定める休業日

(2)　学校行事等により授業が行われない日

３．その他

夜間開館中は、必要に応じ冷房又は暖房が行われます。学生諸君においては、夜間開館を大いに利用して勉学に役立てて下さい。

時間外閲覧（夜間開館）利用状況

	４月	５月	６月	７月	９月
〔開館日数〕	15日	22日	26日	14日	20日
〔入館者数〕	280人	725人	935人	518人	770人
〔一日平均〕	18.6	32.9	35.9	37.0	38.5

▶書庫増設決まる◀

数年来要求してありました書庫の増設が正式に認められ、本年度中にいよいよ実現することになりました。増設される書庫には、既存の書架の約３倍の収容能力を持つ、電動式集密書架を設置の予定です。

現在の図書室の書架状況は、開架書架593棚（文庫、新書用の回転棚は除く）、閉架書架 1,168棚で、ほぼ満杯の状況です。教官室から返却された図書および未製本の学術雑誌は、箱詰めにして置かざるを得ない状況です。さらに、今後毎年約 4,000冊（過去５年間の平均）を受け入れること、また教官室の図書返却希望も５年以内に図書・雑誌あわせて 2,244冊（昭和63年12月現在）あることを考慮するならば、書庫増設は緊急の課題だったわけです。

今回増設の電動式集密書架は、計 1,334棚の予定です。完成時には、より使い易い図書室になります。

図書室利用の皆様には、今秋から年度末にかけて、改修工事、移動作業などでご迷惑をおかけしますが、ご協力ください。

▶新着図書の利用を!!◀

P.14～16に紹介しました図書も含め、４月以降に受け入れた図書約 500冊は、整理のうえ、開架図書室に備え付けてあります。大いにご利用ください。

編　集　後　記

本年から図書主任も図書係長も新しくなって、不慣れなためとまどうことばかりですが、皆さんの御協力で何とかやっています。

本号（第21号）から、新着図書案内を図書だよりからはずし、別個にホームルーム・教官等に配布し、そのかわり新着図書30選と銘打って簡単な紹介を行うことにしました。もっとも今回は、御依頼した数以上の原稿を御寄せ下さった熱心な先生方もおられまして、実際には35冊の紹介になっています。紹介文をお書き頂いた先生方、海外だよりを書いて下さり表紙の写真も提供して頂いた藤原先生、学生の感想文やレポートを選んで下さった諸先生方に御礼申し上げます。

今後とも、図書だよりの充実発展に御協力頂ければ幸いです。

今年は、昨年までにあらかた軌道に乗った図書事務の電算化も若干のデータ入力を残すのみとなり、あらたに、図書夜間開館が始まり、書庫増設計画がいよいよ実現することになりました。図書室の一層の発展のために皆さんの御協力をお願いします。

（林記）